

映画「アルキメデスの大戦」を観て

姫路支部事務局次長 小嶋 榮治

戦艦大和の撃沈されるシーンが凄いというテレビの宣伝文句につられ、久し振りに映画館に足を運びました。

大和と米軍機の壮絶なる戦闘場面から映画が始まりました。CGとはいえ多くの魚雷や爆撃攻撃に不沈戦艦と信じられた大和が傷つき、戦闘不能になり、大爆発を起こし沈んで行く姿は真に迫り、当時の戦闘の実相もこの様であっただろうと思うと胸の高まりが大きくなり、心の底から熱いものがこみ上げてきました。

その後、逸る気持を抑えつつ画面を食い入るように見ていましたら、今までの興奮を一気に興奮めにさせるシーンがあり、愕然とさせられました。

それは主人公が大和設計の参考とするため戦艦長門を訪れるシーンでありました。長門に乗艦したその背景の甲板上には、白い洗濯物が洗濯ロープに吊るされ風に靡いていたのです。

日本海軍には絶対あろうはずのない状態が映し出されていたのでした。私は思わず「それはないぞ」と口に出して叫びそうになりました。

日清戦争勃発以前の明治二十四年、清国は、北洋艦隊司令官丁汝昌提督が率いる当時世界最強と言われた鎮遠・定遠の姉妹艦を主力とする数隻の艦隊を親善友好という名目で日本に派遣し、外交上の圧力をかけてきました。

当時の日本は明治維新をへて開国して間もない時期であり、国力も十分でなく清国の脅威に黒船以来の衝撃を受け恐れ慄いていました。

ところが日本でただ一人、清国海軍恐れるに足りずと確信した人がいました。訪問の途中で平遠が修理のため呉軍港に入港しました。ドック近傍を散策中のその人は、神聖な軍艦の砲塔に洗濯物がぶら下がっているという信じがたい光景を目にしたのです。かかる不作法を外国で行うというのは、彼らの覚悟の程も推し量られ、いかに堅艦巨砲を持っているといえどもその威力を十分には発揮することはできないと看破したのです。

後の日清戦争では彼の見立て通りとなり、日本海軍は完膚なきまでに清国海軍を撃破し大勝利を収めたのでした。その彼とは、日露戦争の日本海大海戦で日本を大勝利に導いた若き日の連合艦隊司令長官東郷平八郎その人でありました。